

復活節第四主日

2015.4.26

ヨハネ 10・11-18

復活祭に続く復活節の主日のミサの中で、わたしたちは主の復活の出来事を語る福音に耳を傾けてきました。これまでの主日の福音においては、復活されたイエスの弟子たちへの現れの場面が語られていました。しかし、今日の福音はそれに区切りをつけるかのように、ヨハネ福音書 10 章のみことばをわたしたちに思い出させようとしています。復活節の主日の福音は、毎年第四主日を迎えると、決まって、ヨハネ福音書 10 章のみことばに立ち戻って、そのみことばをわたしたちに思い起こさせようとするのです。このことには、どのような意味があるのでしょうか。「わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは羊のためにいのちを捨てる」。今日の福音のはじめに響いていたイエスのみことばです。今日の福音の全体は、「わたしはよい羊飼いである」と呼びかけておられるわたしたちの主イエス・キリストのみことばです。

一見、主の復活とは直接関係がないように思われる今日の福音は、注意深く耳を傾ければ、今年も復活祭を迎えてわたしたちが教会の典礼において記念し祝って来た、主イエスの十字架の死と復活の過ぎ越しと深く結びれていることが分かってくると思います。今日の福音のみことばが、何故、復活節第四主日の中で朗読されるのかということを探るためにも、まず今日の福音のみことばを味わうことにいたしましょう。

「わたしはよい羊飼いである」という今日の福音に響くこのみことばは、典礼聖歌によってわたしたちに馴染み深いものとなっている詩編 23 編を思い起こさせます。新共同訳の聖書を開いて、詩編 23 編をあらためて読んでみると次のようになっています。

主は羊飼いで、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも わたしは災いをおそれない。あなたがたわたしとともにいてくださる。あなたの鞭 あなたの杖 それがわたしを力づける。

わたしたちの主イエスが「わたしはよい羊飼いである」とわたしたちに語りかけるずっと以前に、旧約の人々は、イスラエルの民の歴史を導かれたイスラエルの主である神に向かってこのような信仰の歌を歌ってきたのです。旧約の人々にとっては、彼らが主とお呼びした神こそが、彼らの歩みを導く羊飼いで

あったのです。イスラエルの民の歴史の中にお生まれになったイエスが詩編 23 編のこの信仰の歌を知らなかったはずはありません。イエスにとっても、旧約のイスラエルの民の歴史を導かれた、イスラエルの民の主である神こそが、イエスの人生の日々を導かれた羊飼いであったはずです。お育ちになったナザレの会堂で人々ともにこの詩編の歌を歌われたイエスは、イスラエルの民の羊飼いである主である神に向ってこの詩編の歌を歌われたのです。そのイエスが、何故、今日の福音で「わたしはよい羊飼いである」と主張されているのでしょうか。そのことを理解するためには、旧約の預言者たちが語っていたことを思い出さなければなりません。

エゼキエル書 34 章の初めには、次のような神のことばが響いています。「イスラエルの牧者たちに預言し、牧者である彼らに語りなさい。災いだ、自分自身を養うイスラエルの牧者たちは、牧者は群れを養うべきではないか。お前たちは乳を飲み、羊毛を身にまとい、肥えた動物を屠るが、群れを養おうとはしない。お前たちは弱いものを強めず、病めるものを癒さず、傷ついたものを包んでやらなかった。また、追われたものを連れ戻さず、失われたものを探し求めず、かえって力づくで、過酷に群れを支配した」。ここでイスラエルの牧者たちと言われているのは、王や祭司を初めとするイスラエルの支配階級の人々です。これに対して、エゼキエル書 34 章の 11 節からは次のような主である神のことばが響いています。「まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。牧者が、自分の群れがちりぢりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す」。さらに、その先の 23 節では次のように言われています。「わたしは彼らのために一人の牧者を起こし、彼らを牧させる。それはわがしもべダビデである。彼は彼らを養い、その牧者となる」。この最後のことは、旧約聖書の中のメシア預言と言われるものの一つです。ご自分の民の牧者として、主である神が起こすとされているダビデは、わたしたちが知っているイスラエルの王となった歴史上のダビデ王のことではありません。主である神が、ダビデ王の子孫から出ると約束されたメシアのことがここで語られているのです。

「わたしはよい牧者である」という今日の福音のみことばは、このように宣言されたイエスこそが、旧約聖書の中で主である神が約束しておられた、ダビデの子孫から出るメシアであると告げているのです。「わたしはよい牧者である」と宣言されたイエスは、先程のエゼキエル書の主である神のみことばのとおり、わたしたちの真の牧者である神のお姿をこのわたしたちの世界に身をもって示すために来てくださったメシアなのです。

このような理解に立って、あらためて今日の福音を味わってみたいと思います。「わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは羊のためにいのちを捨てる」。

イエスが、「わたしはよい羊飼いである」と言われるのは、羊のためならそのいのちをも捨てる事が出来るからです。わたしたちの主イエスは、十字架の死によって、よい羊飼、すなわち、旧約の預言者が告げていた主である神が起こされるメシアとして、そのいのちをわたしたちのために捨ててくださったのです。今日の福音の終わりには、次のようなみことばが響いていました。「わたしはいのちを再び受けるために捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。・・・わたしはいのちを捨てることもでき、それを再び受けることも出来る。これは、わたしが父から受けた掟である」。いのちを捨てるということが十字架の死を意味するならば、そのいのちを再び受けるとは、イエスの復活を意味していることが分かります。そしてこのことは、「わたしが父から受けた掟である」とイエスは言われているのです。つまり、それが父である神のイエスに託された使命なのだとして今日の福音の中でイエスは言われているのです。

エマオへの道すがら二人の弟子にご自分を現してくださった復活のイエスは、彼らを苦しめていたイエスの十字架の死の意味を、旧約の預言者たちが告げていたことを説明することによって悟らせてくださったと語られていました。先週聴いた福音にも、弟子たちが集っているところにお現れになった復活のイエスは、御自分の死の意味を旧約聖書に語られていることを説明することによって、彼らの心の目を開いて悟らせてくださったと語られていました。

今日のヨハネ福音書 10 章のみことばは、復活のイエスが弟子たちに語られたことを思い起こさせます。イエスの十字架の死は、よい羊飼いであるメシア・イエスが、その羊であるわたしたちのために、そのいのちさえも捨ててくださった死の姿であったのです。その死によって、主イエスはわたしたち全ての者を守り導く真のよい牧者であることを示してくださったのです。

最初に見た詩編 23 編の主の導きのもとに生きる幸せを歌った信仰の歌の最後のフレーズは次のように結ばれています。

わたしを苦しめる者を前にしても あなたはわたしに食卓を整えてくださる。
わたしの頭に香油を注ぎ わたしの杯をあふれさせてくださる。 いのちある
かぎり (あなたの) 恵みといつくしみはわたしを追う。(わたしは) 主の家に
帰り 生涯、そこに留まるであろう。

わたしたちのために十字架の上にそのいのちを捨て、その死を超えて復活されたわたしたちのよい牧者イエス・キリストが、わたしたちを導き連れ戻してくださる「青草の原」、「憩いの水のほとり」、「主の家」を目指して、「わたしはよい牧者である」と言われる主の呼び声を知った者たちとして、わたしたちの牧

者、わたしたちの主イエス・キリストに導かれる一つの群れとなって、わたしたちの人生を歩みとおす恵みをこのミサの中で祈りあいたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高